

青春をわれらに

源氏鶏太



著者の了解
を得て検印
を省略する

昭和32年4月10日 第1刷発行
昭和36年11月30日 第16刷発行

せいしゆん
青春をわれらに

著者 源 氏 鶏 太
発行者 野 間 省 一
印刷所 株式会社 技 報 堂
(大進堂製本)
発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽町3ノ19

振替東京3930

電話大塚(941) 大代表・3111

¥ 190

© 源氏鶏太
一九五七

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

青春をわれらに

源氏鶏太





源 氏 鶏 太

青春をわれらに

装
幀
荻

太
郎

青春をわれらに

敬老精神

一

南部友助さんは、明治二十三年生れだから、今年六十五歳である。自分が創設した南部産業株式会社の社長たるの地位を五年前に、婿養子の周吉さんに譲ってからは、悠々自適していい、まことに結構なご身分であつた。

ところが、友助さんは、一向に悠々自適してくれないので、家中の者が、往生していた。いや、持て余している、と云った方が、当っているかも知れない。と云つて、別に、女狂いをする、と云うのではない。ただ老人のくせに、心身ともに、元氣があり過ぎるのである。朝から晩まで、家の者に対して、叱咤号令し続けるのである。

それがこの老人にとって、唯一の健康法である如くに――。

たとえば、友助さんは、前の晩、どんなに遅く寝ても、朝の四時には、かならず、眼があくのだそうだが。それからの一時間、起きたいのを我慢して、何んとか寢床の中にいる。柱時計が、五時を鳴らすと、むっくりと起き上つて、のこのこと女中部屋の前へ出かけていくのであつた。

「これ、ヒロ。起きなさい。五時が鳴ったぞ。女中のくせに、毎日、わしに起されるとは、何事であるか。恥かしいと思わんのか」

そう、云いながら、扉をドンドンと叩く。なかなか、ヒロが、すぐに、

「はい、大旦那さま」

と、返辞をするといひのだが、寢呆け声でも出したりますと、

「何んだ、その声は。もっと、しゃんとした声を出しなさい」

「はいッ、大旦那さま」

「うん、よろしい」

ヒロを起すと、友助さんは、いかにも満足そうに、いったん、自分の部屋へ、引きあげるのである。いつか、ヒロが、今日こそは、起きる先に起きていてやろうと、扉を叩かれる前に、中から、はいッ、大旦那

さま、と云ったら、友助さんは、その日一日、ひどく、機嫌が悪かった。以来、ヒロは、「女中のくせに」起きるまで、起きないことにしている。何かの必要で、四時に起きねばならないことがあったりすると、ヒロは、わざわざ、友助さんの部屋へ出かけて行って、「すみませんが、明日の朝、四時に起きて頂けませんでしょうか」

と、頼むことにしていた。

「バカ者。そんなこと、わしに頼みにくる奴があるか。女中なら女中らしく、自分で起きなさい。努力が足らん」

しかし、そんな時の友助さんのご機嫌は、大層いいのである。そして、翌朝の四時には、ちゃんと、起してくれるのだ。

ついでながら、友助さんは、ご隠居さま、と呼ばれることをひどく嫌っていた。大旦那さま、でない、と、承知をしないのである。

さて、廊下続きになっている離れの自分の部屋へ、いったん、引きあげた友助さんは、もう一度、蒲団の中へもぐり込むのだが、あとは、眼をパチパチさせながら、六時になるのを、今か今か、と待っているのがあった。そして、その六時になると、こんどは、孫の

洋一（高校二年）と正二（小学校五年）の寝ている部屋へ、出かけていくのである。

「これ、起きなさい。もう、六時ですぞ」

「おじいさん、まだ、早いよ。もう、三十分、寝かせてよ」

「いや、いかん。子供の頃から、そんな朝寝坊をしてはいかん。さア、起きなさい」

起きるまで、友助さんは、その部屋から出ていかなのである。蒲団をはねのけかねない。孫たちは、あきらめて起き出すよりしようが無かった。

次は、もう一人の孫、女子大二年生の美奈を起す番である。美奈は、自分一人の部屋を貰っている。一ヵ月ほど前か、友助さんは、美奈の部屋へ、ずかずか入っていった。

「これ」

と、云うや、美奈は、待ちかまえていたように、

「おじいさん、失礼よ」

と、鋭く逆襲した。

「何？」

「だって、ここは、レデーの部屋よ」

「レデー？」

友助さんは、愕然としたのである。

（そうか、もう、二十歳になっているのか）

友助さんが結婚したのは、二十五歳の時で、当時、奥さんのミツは、二十歳であった。そのミツさんは、十年も前に亡くなったのだが、それはともかくとして、すでに美奈が、ミツさんの結婚した時の年齢になっているのだ、と思うと、友助さんも、今更のように美奈を見直さずにいられなかった。なるほど、すっかり、一人前の美しい娘になっている！

以来、友助さんは、部屋の外から、美奈を呼ぶことにしていた。隔靴搔痒の感があるが、仕方がない。それをいいことに、美奈は、いくら呼ばれても、狸寝をしていることが、よくあった。しかし、流石の友助さんも、レデーに対しては、どうにもならないようだ。その次は、いよいよ、周吉さんを起すことになるのだが、しかし、これは、婿養子であるから、比較的、簡単である。友助さんが、生存している限り、この家で、周吉さんの地位は、婿養子に來た二十年前と、あまり、変ってはいないようであった。

その頃には、娘の頼子さんは、もう、起きている。見るに見かねて、

「おじいさん。ゆんべは宴会で遅かったんですよ。だから、もうちょっと、寝かしてやって頂戴」

と、救け舟を出すのだが、友助さんは頑として聞かない。

「朝、起き辛いような宴会なら、出ない方がいいのである。そもそも、昔のわしは、どんなに遅く帰っても――」

「おじいさん。その話なら、もう、耳にタコが出来るほど聞いたわ」

「では、あとの方は、省略してもいいが、とにかく、起しなさい。会社の出勤時間に遅れてはならん」

「何も、社長になってまで、出勤時間に間に合わなくてもいいのでしょうか？」

「いや、社長なればこそ、出勤時間に間に合わなければならんのだ。でなかったら、社員に対して、しめしがつかん。わしなんか、いつでも、社員たちより、三十分も早く出勤したもんだ」

その頃には、周吉さんも、たまりかねて、

「お義父さん、起きますよ」

「よろしい、さア、起きなさい。そして、今日は、子供たちといっしょに、庭の落葉を集めなさい」

「ええ、分りましたよ」

周吉さんと雖も、ふてくされたような声を出す権利はある。しかし、いつでもそれが限度であった。

周吉さんは、その昔、南部産業の社員であったのだ
が、見込まれて、婿養子となったのである。したがっ
て、友助さんの前に出ると、舅であると言ふ思いと、そ
れ以上に、雷社長として仕えていた頃の恐怖感が、ど
うしても、抜けないのであった。しかも、今や、その
雷ぶりは、年とともに、威力を発揮しつつある。あの
元氣では、当分、死にそうにないし、周吉さんは、そ
れを思つて、時々、絶望的なことすらあった。

南部家の庭は、二百坪ぐらいあって、いろいろの樹
木が茂っている。したがって、落葉の量も、おびただ
しいのである。周吉さんは、三人の子供といっしょ
に、その落葉を、掻き集めていた。

「これ、美奈」

と、友助さんが、云った。

「何よ、おじいさん」

「落葉を掻くのに、手袋なんかをはめてしてはいかん
ですぞ」

「あら、どうしてよ」

「どうしてって、手袋をはめているのは美奈だけです
ぞ」

「だって、あたしは、女だから、これでいいのよ。女
の掌なんて、美人の条件のひとつになっているのよ。」

シモヤケでも出来たら困るわ。それとも、おじいさん
は、自分の可愛い孫娘が、シモヤケだらけの掌をして
いた方が嬉しいの？ 白いすべすべした掌をさしたく
ないの？ そんな不人情なおじいさんなの？」

「いや、わしは、これでも、芯は、大へん情の深いお
じいさんのつもりだ。では、手袋は、美奈にだけ、許
すことにする。これ正二。その隅の方を、もっと、
綺麗にしないさ」

とたんに、正二が、大声で、云った。

「おじいさんがいちばん、ずるいや」

「何？」

「だって、おじいさんは、文句ばかり云うくせに、自
分は、襟巻をして、フトコロ手をして、ただ、立っ
ているだけだもの」

これは、さっきから、みんなの最も云いたいところ
であった。正二の言葉に、周吉さんも、美奈も、洋一
も、手を休めて、友助さんの方を見た。

しかし、友助さんは、一向に、あわてず、おどろかず、
「要するに、敬老精神です」
と、云ったのである。

「敬老精神ですって？」

と、周吉さんがあきれたように云った。

「さよう。わしは、孫たちに、年寄を大事にすることは、如何に必要か、こうやって、身を以て教えているのです。今のうちから、年寄をいたわる癖をつけておくと、将来、それが、自分に戻って来ます。現に、このわしが、そうである。さア、働いて、働いて」

やがて、山と積まれた落葉に、火を点けた。白い煙を上げていた落葉から、焰が上ってくると、友助さんは、フトコロから両手を出して、その上にかざして、「どうだ、みんな、いい気持であろうか」と、云うのである――。

二

友助さんの叱咤命令は、このようにして、一日中、続くのである。もし、それを一々気にしていたら、恐らく、神経衰弱になるに違いない。しかし、幸いにして、目下のところ、誰も、その心配はないようであった。ただし、周吉さんの宴会の多すぎるのは、多少、その憂さ晴らし的な傾向があるのかも知れない。

女中のヒロにいたっては、一向に、こたえぬようであった。十八歳の娘なのだが、友助さんに叱られて、二分とたたぬうちに、陽気に、流行歌を唄ったりしている。そう云う神経だからこそ、この家に勤めること

が出来たのだらう。ヒロの前の女中は、たった三日で、逃げて行ってしまった。その前の女中は、一ヵ月と続かなかった。その点、友助さんも、すでに、一年以上続いているヒロの神経のふとさを認めて、内心、珍重に思っているようである。それに、友助さんの部屋の掃除は、ヒロの役目になっていた。あんまり叱りつけると、ヒロは、堂々とサボタージュをして、友助さんを困らせる。勿論、友助さんは、そんなとき、大いに怒るのだが、しかし、怒ることが、友助さんの生甲斐みたいになっているのだとしたら、ヒロは、友助さんの知己と云うべきであるかも知れないのである。

ある日曜日の夜であった。

友助さんが、珍らしく、自分の部屋に引きこもって、夫婦と子供だけが、茶の間に集まっていた。

美奈が、ブンブンしながら、云った。

「あたし、今日、おじいさんのために、すっかり、恥をかいてしまったわ」

「どうしたんだね」

と、周吉さんが云った。

「お昼、隅田さんが遊びに来たでしょう？ 応接室で、ジャズレコードをかけていたのよ。するとおじいさんが、ごめん、と云って入って来て、しばらくたっ

てから、これ、美奈、そんな胸クソの悪くなるような音楽は、やめなさい、せっかくかけるなら、ちゃんと西洋音楽にしなさい、と云うんだもの。それで、隅田さんが、では、どう云う音楽にしましょうか、と云ったら、うん、ベートーベンがいいな、ですって」

そこまでは、まだ、よかったです。そのあとで、友助さんは、隅田の姿を、上から下まで眺めて、

「あんた、学生さんですか」

「ええ、美奈さんと同じクラスです」

「では、背広なんか着てはいかんな。学生は、学生服に限る。それが、いちばん似合う。あんたなんか、背広を着るのはまだ、早い。第一、ちょっと、似合わない。いいですか、この次、もし、家へくるんなら、学生服で来なさい。分りましたか」

と、友助さんは、意見をするように、云ったのであった。

隅田は、うつむいて、赤くなったり、青くなったりしていた。これは、聞きしにまさる頑固爺だ、と思っただかも知れない。早々に、退散していったそうだが、精神帰りしなに、

老「僕は、当分、遊びにこないよ」

敬と、美奈に、憤然として、云ったのである。

勿論、美奈の胸は、おさまらない。隅田が帰ると、すぐに、友助さんの部屋へ乗り込んでいった。

「おじいさん、あんまりよ。あたし、すっかり、恥をかいたわ」

しかし、友助さんは、泰然自若として、

「あの青年は、美奈の恋人かね」

「失礼ね。ただのボーイフレンドよ」

「しかし、そのうちに、恋人になる可能性が無いわけであるまい」

「将来のことは、分るもんですか」

「だから、わしは、わざと、嫌われるように云ったのだ。とにかく、あの青年はよくない。バックボーンがない。一目で分った。だから、ダメなんだ。要するにわしの祖父心の発露である」

そう云って、もう、喧嘩にも何も、ならなかった。

「なるほど、祖父心か、うまい言葉だね」

周吉さんも、友助さんの人を見る目の案外、確かなのを知っていた。まして、ことが、娘の一生の問題に関連していることなので、この場合は、いちがいに、友助さんを非難する気になれなかった。

「あんなことがあると、もう、誰も、あたしとこへ、遊びにこなくなるわ」

と、美奈は、まだ、プリプリ、怒っているのである。
頼子さんが、溜息をつくように、

「本当に、困ったおじいさんだわね。ねえ、あなた、何んとか、ならないものかしら」

「何んとかって？」

「あたしね、この間から、いろいろ、考えたんですよ。いっそ、誰か一人、女中をつけて、別居してでも貰ったらどうかしら、と」

「承知するもんか。それより——」

と、周吉さんが云ってから、あとの言葉を、子供たちの手前、ちょっと、はばかりような顔をした。

そこへ、友助さんが入って来た。美奈に文句を云わされたことなど、ケロリと忘れたような上機嫌な顔で、

「さア、面白い物を見せてやるぞ」

「何んですか、おじいさん」

と、正二が、云った。

「うん。わしは、この一ヵ月間、家族の者の帰宅の時刻をひそかにグラフにしていたんだよ」

「帰宅の時刻ですって？」

と、周吉さんが、苦笑した。

なるほど、一枚のグラフに、家族の帰宅時刻が、グラフに描かれていて、ところどころに、注が入っていた。

「周吉は、十二時過ぎに帰ったのが、七回もあるぞ」
「へえ、そんなにありますか」

「あるとも、これを見なさい。十一時が五回、まともに帰ったのは、たったの四回である。遅くなった原因は、みんな、宴会となっているが、周吉、ちょっと、多すぎるぞ」

「はい」

「頼子。お前さんも、ちょいちょい、遅くなっているぞ」

「あら、それは、お花を習いにいたり映画を見にいたり、ですわ。嫌なおじいさん」

「美奈」

「知らないわ」

美奈は、プツと横を向いた。

すると、正二が、

「あッ、僕も、グラフをつくったんだよ。見せようか」

と、云って、部屋から出ていったが、やがて、戻ってくる、得意そうに、

「これ、おじいさんの怒った回数を書いたんだよ」

「何んだって？」

と、友助さんは、飛び上らんばかりにおどろいた。
「先生が、何んでもいいから、グラフをつくれ、と云

ったから、僕は、おじいさんが、どれだけ、怒るか、統計にとったんだ。僕が、学校へ行っている間のこと、は、ヒロに聞いたんだから、間違いないよ」

周吉と頼子は、顔を見あわせた。笑いたいような、笑ってはならぬような顔と顔であった。しかし、美奈と洋一は、わつとばかりによるこんで、

「見せて、見せて」

「まア、日に十二回と云うのがあるわ。すくなくとも、七回よ。凄いわねえ、おじいさん」

友助さんは、まるで、棒でも呑み込んだような顔で、

「これ、正二。それを、学校へ持っていくのか」

「うん、明日」

「いかん。これ、絶対に、いかんですぞ」

「だって、みんな、持っていくのに、僕だけ持っていないと、叱られるよ。それに、僕は、正直に書いたんだよ。おじいさんは、いつでも、正直の頭に神やどる、と僕に云うじゃアないか」

「そうよ、そうよ」

と、美奈が、嬉しそうに、応援した。

流石の友助さんも、すっかり、閉口している。いつもの元気を、どこへやったのやら、と云うところであった。

縁 談

一

女中のヒロが、正二の部屋へ入って来て、

「正二坊っちゃま。大旦那さまが、お呼びでございます」

と、云った。

そのとき、洋一は風呂に入っていて、正二ひとり、が、部屋にいたのである。

「うん」

「大旦那さまは、さっきのグラフを持って、すぐにくるように、とおっしゃっていました」

「グラフだって？」

「いったん、立ち上りかけた正二はグラフと聞いて、そのまま、坐り込んでしまった。ニヤリとして、

「僕は、行かないよ」

「まア、どうしてでございますの？」

「ヒロ。おじいさんに云ってくれよ。もし、ご用があるなら、おじいさんの方から来てください、と。それが礼儀と云うもんだからね。だって、おじいさんは、